

黙示録1章9－20節 「キリストの栄光の幻」

1A パトモス島のヨハネ 9－11

1B 共に苦しむ者 9

2B 主の日への幻 10

3B 七つの教会への使信 11

2A 人の子の幻 12－16

1B 真ん中におられる方 12－13

2B 栄光と威厳 14－16

3A 甦られた主 17－20

1B 励まし 17－18

2B 三つの区分 19

3B 七つの教会と御使い 20

本文

黙示録の学びは、1章8節まで来ました。ここまでは、挨拶であり、またヨハネが全体で語ることについての導入でありました。そして9節から、実際にヨハネが主ご自身から言葉を受ける場面を見ていきます。私たちはちょうど、預言者エゼキエルが主から言葉を預かり、それをユダの民に語る時の話を礼拝において読んでいます。彼は、まず主の栄光の幻を、ケルビムの上に座しておられる主の姿を見て、それで命令を受けて語りましたが、ヨハネもそれと同じです。主イエス・キリストご自身の栄光の姿を見て、それでこれからの言葉を書き記すように命じられています。私たちが普段、あまり意識しないイエス様のお姿です。

1A パトモス島のヨハネ 9－11

1B 共に苦しむ者 9

9 私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。

ここにヨハネのへりくだりと、心の暖かさが伝わってきます。「あなたがたの兄弟であり」と言っています。そして、「あなたがたとともに」と言っています。彼は、教会の人々と自分を切り離すことを考えず、彼らに通っている苦難、教会として通っている苦難が、キリストの体として自分の苦難でもあるという、共同体、切っても切り離せない見方をしていました。そして彼は、十二使徒の一人で、老齢の、イエス様に直に触れた生き残りの証人です。ここから、人間的には変な権威が付けられても全くおかしくありません。人々が彼を祭り上げるでしょうし、そして本人も自分は霊的に他の人々より高いと思うでしょう。しかし彼は、「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり」と言ったのです。

そして、「イエスにある苦難と御国と忍耐」と言っています。神の支配される国、そのことを熱心に待ち望む者たちの間には苦難があります。イエス様は十字架に付けられる前に弟子たちに、「あなたがたは、世にあっては患難があります。(ヨハネ 16:33)」と言われました。そしてこの時、キリスト教会は、皇帝ドミティアヌスによる迫害の波の中にいました。パウロは、ルステラで人々から石を投げられて、死んだように見られる程になりましたが、立ち上がった後に、「弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりととどまるように勧め、『私たちが神の国にはいるには多くの苦しみを経なければならぬ。』と言った。(使徒 14:22)」とあります。私たちがキリストの支配の中に生きる時、共同体としての呻きを経験します。それは、私たち自身が神に支配されている国であるし、また将来、キリストが戻って来られて地上に立てられる国を待つ時に受ける呻きです。

そしてヨハネは、「神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた」と言っています。彼が御言葉を伝え、主を証していた中で、捕えられました。初代教父による伝承によりますと、彼は煮えたぎった油の大釜の中で殉教するところでした。ところが奇跡的に命が助かり、それでパトモス島に島流しになって鉱山で強制労働をさせられていたと言われています。そしてパトモス島は、小アジアのエペソから約 50 キロメートル沖にある島ですが、今はギリシヤ領の中にあります。今でこそ、開発が進み、観光地となっていますが、当時は茨と岩の島でした。独自の水源はなく、食糧も乏しく、日差しの強い厳しい所でした。おそらく強烈な孤独感と無力感の中に彼はいたことでしょう。しかし、ここにあるように自分がここにいるのは、神のみことばとイエスの証しのため、また他の兄弟たちと共に苦しみ、御国を待ち望み、忍耐しているのだということを知っていました。そんな時に、神々しい幻を見るのです。

2B 主の日への幻 10

10 私は、主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな声を聞いた。

彼は「御霊に感じた」とあります。これは単に感じたということではありません、圧倒的な、抗うことのできない御霊の力が彼に臨んだ、ということです。エゼキエルがそうでしたね、霊が彼の中に入って、それで彼は苦々しくなるほど、他のところに引っ張られていたり、また霊が入って、立ち上がったりしました。こうやって神の御霊の圧倒的な支配の中で動かされたのです。

そして、それが「主の日」にあったとあります。これは二つの解釈があります。一つは日曜日だ、というものです。確かに、新約聖書には、聖霊が降ったのが五旬節の満ちた日、日曜日であったし、また主が甦られたのは安息日の明けた次の日、日曜日でした。そして、彼らが集まってパンを裂いたのが、「週の初めの日(使徒 20:7、1コリント 16:2)」であることが書かれています。しかし、旧約聖書には、例外なく主の日とは、「神が地上に怒りを下し、ご自分の正義と平和を地上に確立される日」として描かれています。例えば、イザヤ書にはこう書いてあります。「13:9 見よ。主の日が来る。残酷な日だ。憤りと燃える怒りをもって、地を荒れすたらせ、罪人たちをそこから根絶やしにする。」そして新約聖書でも、「主の日」という言葉は、その意味での言葉、終わりの日のことを話し

ています。(1 コリ 5:5、1 テサ 5:2、2 テサ 2:2-3、2 ペテ 3:10)そして、これは、黙示録全体を読めば終わりの日のことを指していることは明らかです。これから、主の日が来ることを告げているのが黙示録だからです。

そして、「私のうしろにラツパの音のような大きな声を聞いた」とあります。主が天から降りてこられて、その聖さ、また栄光と威光の力を示されたのは、シナイ山においてでありましたが、「山の上に雷といわずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。(出エジプト 19:16)」とあります。そしてラツパの音は、民を招集する時や戦いに臨む時にも、吹かれます。そして新約聖書では、やはり主が天から降りて来られる時、私たちが空中に引き上げられる時に聞こえるものです(1 コリ 15:52、1 テサ 4:16)。そして黙示録では、何度となく、ラツパが吹き鳴らされる場面が出てきます(4:1;8:2,7,8,10,12;9:1,13;11:15)。

3B 七つの教会への使信 11

11 その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。」

前回お話ししたように、主が書き記しなさいと命じられたのは、七つの教会に対するものでした。地図で見ると、エペソから始まり、時計回りで三角形の形をして順番に並んでいます。おそらく、道路の交通網が発展していたので、ヨハネの書き記した黙示録の回覧は速やかに行われたことでしょう。そして「七」という数字は、神の完全数を示すことも、この前お話ししました。その地域教会にある問題に対して主は語られていると同時に、それぞれの教会に、「御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」と言われているのですから、教会全体に対して語っておられることであります。ヨハネは、主からの直接の命令に対して、恐れおののきつつ、神のことばとしてこれを書き記し、そして釈放後にエペソに戻ったと言われていますが、これをそれぞれの教会に送ることを命じたことでしょう。迫害の中で疲れてきている兄弟たちに大きな励ましとなり、また、主から離れかけている霊的状况の中に、厳粛な警告となる大きな幻であります。

2A 人の子の幻 12-16

1B 真ん中におられる方 12-13

12 そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。13 それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。

主イエスご自身の神々しいお姿です。ヨハネが今、御霊によって主の日の幻の中に導かれているのですが、彼にとってこれが初めての経験ではありません。高い山に連れて行かれた時も、そうでした。主は、「マタイ 16:28 ここに立っている人々の中には、人の子が御国とともに来るのを見るまでは、決して死を味わわない人々がいます。」と言われましたが、その六日後に、高い山にペテ

口とヨハネとヤコブを連れて、そこで神々しい姿をお見せになります。「17:2 そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。」これが、天の御座におかれる御子の姿、その栄光であります。イエス様は、十字架に付けられる直前、御父に対して、「ヨハネ 17:5 今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」と祈られました。その栄光です。世界が存在する前からあった栄光ですから、シナイ山において天から降りてこられた時の栄光にも主の栄光がありましたし、そして御国が到来する時に王の王、主の主として現す栄光でもあります。イエス様は、天地万物の神、王たる方の御子ご自身なのです！

まず主は、七つの教会を「七つの燭台」としてお見せになっています。燭台は、幕屋や神殿において祭司たちが仕える聖所において、その中を照らす重要な役割を担っています。主ご自身が光の中に住まれ、そして私たちはこの方の中におり、光を放っています。世の光として教会は召されています。そして実に、その迫害下で、教会の中に火がともされていたのです。そして燭台として示されることは、とても大切です。1章6節で、私たちが祭司たちの王国なのだということが書かれていました。私たちは聖別された国民であり、そして神に対して祭司であり、この地上に祭司として立たせられているのです。

そして主は、その「真中」におられます。迫害を受けている教会、この世から圧迫を受けている教会にとってなんという慰めでしょうか！この世においては阻害されている教会の中に、それでもえ主は真中におられます。「マタイ 18:20 ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」と主は言われました。

主は、ご自身を「人の子のような方」として現しておられます。ダニエル書において、その預言があります。「ダニエル 7:13-14 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」イエス様も大祭司カヤパの前で、そのことを告白されました。御父から裁きを行なう権威を与えられ、そして主権と力、光栄をもって御国を立てられることを、この「人の子」の称号には含まれます。

そしてイエス様は、「足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締め」ておられます。私たちを主は、祭司として召していただきましたが、主ご自身は私たちに取って偉大な大祭司です。足にまで垂れた衣は、祭司的な姿を現しています。大祭司の装束を思い出させるものです。しかし、胸には金の帯が締めてあります。これは王の輝きを示しているのでしょうか。王であられ、そして祭司であられる姿です。その威光に満ちた姿が、詩篇 93 篇に証しされています。「93:1-2 主は、王であられ、みいつをまとっておられます。主はまとっておられます。力を身に帯びておられます。まことに、世界は堅く建てられ、揺らぐことはありません。あなたの御座は、いにしえから堅く立ち、あなたは、とこ

しえからおられます。」

2B 栄光と威厳 14-16

14 その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。15 その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。16 また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。

主の真っ白な頭髪は、全く汚れたところのない、聖なる姿を表しています。「私が見ていると、幾つかの御座が備えられ、年を経た方が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭の毛は混じりけのない羊毛のようであった。(ダニエル 7:9)」とありますが、神の姿ですが、年を経たとあるので、この髪が年老いて白髪なのか、と誤ってしまいますがそうではなく、永久まで生きられる方が、全く純潔な方であられる、ということです。

そして「その目は、燃える炎のようであった」とあります。これは、全てのことを見通す鋭い目のことを示しています。主が教会の中におられるのですから、主は燃えるような火で、その妬むような愛で、私たちを見つめておられます。

足は、「炉で精練されて光り輝くしんちゅうのよう」とあります。これはエゼキエル書にあるケルビムの姿、さらにその上に座す主ご自身の姿と重なります。主が地上に裁きを行われ、ことごとく諸勢力を制する姿であります。主が再臨される時に、「万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。(黙示 19:15)」とあります。主は勝利する方です！

それから、「その声は大水の音のようであった」とあります。この方の威厳を示しています。御声が全地に鳴り響いていることを意味しています。先ほど読んだ詩篇 93 篇の続きには、こうあります。「93:3-4 主よ。川は、声をあげました。川は、叫び声をあげました。川は、とどろく声をあげています。大水のとどろきにまさり、海の力強い波にもまさって、いと高き所にいます主は、力強くあられます。」これは、紅海が分かれた時、またヨルダン川をヨシュアたちが渡る時の事を指していると思われませんが、自然界にこのような形で主が介入されていることを思い出すだけでも、私たちの主の偉大さを思い出せます。

そして、「右手に七つの星を持」っておられるとあります。この七つの星は、七つの教会の御使いであると後で主が解き明かされますが、つまり教会をご自分の力ある手で握っておられるということです。私たちの教会も、主がこのように握っておられます。このことを認めつつ、私たちは礼拝を守っています。私たちが、この方に手に握られているということを意識しましょう。

そして、「口からは鋭い両刃の剣が出て」います。これは、主ご自身の御言葉の強さです。もち

ろん私たちは、ヘブル 4 章 12 節にあるように、私たちの魂と霊の分かれ目さえも刺し通す剣のような御言葉を知っていますが、ギリシヤ語では異なる言葉が使われています。ここでは、「トラキア人が使った幅広く長い大剣」ということです。当時のギリシヤ系の人々が戦った時の武器で使われており、主が諸国の民に戦われる時に鋭い剣が出ている様子が描かれています(19:15)。主はこのような方なのですが、イザヤ書 49 章 2 節には、「主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。」とありました。地上におられたイエス様は、諸国の民を滅ぼす剣をその口に持っておられました、それを矢筒のようにして隠しておられたということです。へりくだる姿、思慮深さがここに表れています。

そして、「顔は強く照り輝く太陽」です。先に読んだ、イエス様の変貌の時にも太陽のような輝きがあったとありました。これが神ご自身の輝きであり、主ご自身の麗しさとも言えるでしょう。太陽のような輝きは、ソロモンが妻シュラムの女を、王妃として輝いていることをこのように形容しました。「雅歌 6:10 暁の光のように見おろしている、月のように美しい、太陽のように明るい、旗を掲げた軍勢のように恐ろしいもの。それはだれか。」ですから、その美しさ、輝き、それによって軍勢のような恐れさえ抱く、神々しさがあるということです。イエス様はマラキ書では、「義の太陽(4:2)」と呼ばれています。ですから、教会は燭台、御使いは星であります、イエス様は太陽であります。

3A 甦られた主 17-20

これぞ、主の栄光の輝きであります、私たちがその一つ一つを見て、へりくだる、ひれ伏すのです。これが礼拝ですね。しかし、この姿をもちに見たらどうなるのか？それが次の箇所にあります。

1B 励まし 17-18

17a それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。

腰が抜けるというような反応以上、倒れて死人のようになってしまいました！実は、使徒ヨハネが初めての人ではありません。ダニエルが、栄光の御子の姿を見て、同じようになっています。「10:5 私が目を上げて、見ると、そこに、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、腰にはウファズの金の帯を締めていた。6 そのからだは緑柱石のようであり、その顔はいなずまのようであり、その目は燃えるたいまつのもようであった。また、その腕と足は、みがきあげた青銅のもようであり、そのことばの声は群集の声のもようであった。7 この幻は、私、ダニエルひとりだけが見て、私といっしょにいた人々は、その幻を見なかったが、彼らは震え上がって逃げ隠れた。8 私は、ひとり残って、この大きな幻を見たが、私は、うちから力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った。9 私はそのことばの声を聞いた。そのことばの声を聞いたとき、私は意識を失って、うつぶせに地に倒れた。」主から、その御言葉を預かる使命を受ける者は、同じような経験をしています。イザヤは、主の御座のセラフイムを見て、「災いだ、私はもうだめだ。」と言いました。エゼキエルも、主の栄光を見ました。ダマスコの途上のパウロも、復活の主の光を見て倒れて、少しの間、目が見えなくなりました。そして

主は、命令を与えられるのです。このように、自分が貧しくさせられる、圧倒的なへりくだりへと導かれる体験が、主の使命を果たすのに必要なことでしょう。

17bしかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。

主が右手を置いてくださっています。ダニエル書 10 章においても、「一つの手が私に触れ、私のひざと手をゆさぶった。」とあります。主が愛しておられるダニエル、そして主が愛しておられるヨハネです。かつて主は、ペテロを呼ばれる時も、「恐れなくてよい。あなたを人をすなだる漁師にする。」と呼ばれました。そして主は、「わたしは、最初であり、最後」と言われます。これは、「初めから終わりまでである、一切合切」という意味です。イエス様が永遠なる方で、あらゆることに主権を持っておられ、あらゆることに関わっておられ、そして全てを動かしておられる支配者である、ということです。これが、どれだけヨハネを励ましたことでしょうか、そして私たちに励ますことでしょうか！

そして大事なイエス様の発言があります。「生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。」と言われます。ヨハネが死んだ者のようになってしまいましたが、今、「わたしも死んだが、今、生きている。」と言われています。たとえ死ぬようなことがあっても、それでもあなたには、よみがえりの主がいるのだということです。

そして教会において、復活の主が支配しておられることを知ることは大事です。主は、一度死なれましたが、甦られ、そして今も生きておられます。ヨハネの時代には、イエス様が昇天されてから既に 60 年以上経っていて、イエス様は果たして生きているのか？という実感が湧かない状況だったのではないのでしょうか？私たちが、戦後直後の復興と言われても実感が湧かないように。しかし、「今も生きている」とものすごい強い顕現をもって示しておられるのです。「わたしは死んだ」という部分でさえ、ここは「自ら死んだ」というような主体的な意思が含まれているそうです。主がご自分の意志で死なれ、そして甦られたのです。そして歴史は、その復活の主が生きておられるということで続いているのです。私たちは、かつての弟子たちのように、「主は甦られた」という臨場感をもって生きるように召されているのです。そのために、主は今の教会にも聖霊によって励ましを与えてくださいます。

それから、「死とハデスとのかぎを持っている」と言われます。死ぬことについて、また死後の陰府の世界について、主ご自身が全て掌握しておられるということです。これが教会の特色でしたね、「マタイ 16:18 ではわたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。ハデスの門もそれには打ち勝てません。」ですから、死は教会に何ら力を持っていません。恐れるべき方はゲヘナに投げ込むことのできる権威を持っておられる主であり、人はその魂に対して何もすることができない、ということです。

2B 三つの区分 19

19 そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。

ここは、黙示録全体の構成を把握するのに、鍵となる重要聖句です。黙示録は、三つの部分に分けることができます。一つは、「あなたの見た事」です。ヨハネは今、天におけるイエスさまの栄光の御姿を見ました。ですから、1 章を、「あなたの見た事」に区分けできます。そして、「今ある事」は、イエスさまがこれからメッセージを送られる、教会の事です。黙示録 2 章と 3 章に書かれています。この 2 章分を、「今ある事」として区分けできます。そして、教会の事の後に、「この後に起こる事」があります。4 章 1 節をご覧ください。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」とあります。今ある教会の後に起こること、教会が携挙された後に起こることが、黙示録 4 章以降に書かれています。ですから、4 章から最後の 22 章までを、「この後に起こる事」として括ることができます。このアウトラインを頭に入れて、黙示録全体を読めば、19 章後半に出てくるイエスさまの再臨がクライマックスであることを頭に入れて読めば、細部の表現にとらわれて、右往左往するのではなく、大きな流れとして黙示録を読むことができます。

ちなみに教会において、黙示録にはいくつかの解釈がありました。一つは、「歴史的解釈」と呼ばれるものです。これは、全て教会史の中で起こることをパノラマ的に見ているとしています。19 章の再臨の直前までが教会史のものであるとしました。けれども、今話しましたように、確かに 3 章までは教会史であります。しかし、「この後に起こること」と 4 章以降を主は語っておられるのです。そして「比喩的解釈」というものもあります。これは、全てを善悪の戦いというような抽象的な話にしてしまっ、全てを象徴的に捉えています。そして、「過去の解釈」というものもあります。これは既に 70 年に、テイトスがエルサレムとその神殿を破壊した時に、ほぼ全ての預言が成就したという考えです。でももちろん、黙示録は 90 年代以降に書かれていますから矛盾しています。そして「未来的解釈」があります。これが今、説明したとおりのことです。4 章以降は未来に関わるものであると、そのまま読めば出てくる解釈であります。

3B 七つの教会と御使い 20

20 わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。

イエス様自身が解き明かしてくださっていますが、七つの燭台が教会、そして七つの星が御使いです。ここの「御使い」について解釈が分かります。「使者」とも訳すことのできるのです。ここを教会に立てられた指導者、牧者と解釈する人たちもいます。けれども私は、御使いを示している同じギリシャ語が使われているので、そのまま普通に天使であると考えます。そしてこれから、主は七つの教会それぞれに、御使いを介して語られます。